

早明浦ダム再生事業環境モニタリング委員会

第3回委員会における委員指摘事項とその対応

令和7年9月4日

独立行政法人水資源機構
吉野川上流総合管理所
早明浦ダム再生事業推進室

第3回委員会における委員指摘事項とその対応 1

早明浦ダム再生事業環境モニタリング委員会（第3回）

開催日時：令和6年10月1日(火)14:00～16:00

開催場所：早明浦ダム・高知分水管理所 ふれあいホール

整理番号	指摘事項	対応
1	河川水辺の国勢調査（以下、水国という）の項目には付着藻類がないため、ダムに近い調査地点において、可能であれば付着藻類の調査も実施した方が良い。 何か問題が起きた時の臨時の生物相の調査は、調査の項目や実施体制について、検討しておく必要がある。	吉野川環境調査の実施を継続するとともに、濁水発生を目安及び臨時調査計画を定めました [別紙-1、2]。付着藻類の調査については、吉野川環境調査の調査地点で、最もダムに近い「土佐本山地点」の調査を継続し、モニタリングしていきます。（水資源機構による調査は令和8年度以降必要に応じて実施予定）
2	騒音計交換以降に測定値が下がった点は、検定を受けた装置でこのような誤差が出ることは考えられないので、原因の究明をお願いしたい。また、本来は交換時に確認する必要がある。	検証の結果、騒音計の機器不良が原因と判明しました。【委員会後説明済】
3	降雨が多かった時の濁水が継続することはないことはデータからわかるが、工事前と比べて工事中の濁水の量や継続時間が増えたかどうかというのは、工事開始前のデータと比較しない限り確認できないと思う。濁った水の影響を評価できるのは濁度のデータだけで、濁度の大きさと継続時間は、底層に与える影響が非常に大きいため、重視する必要がある。 水質の当初予測結果が間違いなかったかどうか。予測結果と比較して確認することは非常に重要なため、お願いしたい。	工事前の期間（2014～2020年）を含めた濁度及び継続日数を整理しました。 [別紙-3] 今後も濁水の監視を継続し、特異な状況が発生した場合には、臨時調査を行う体制とします。 [別紙-2]
4	水質の基準、濁水評価基準というのがわかりにくい。濁水評価基準の書き方、基準をどう説明するのかというところは、次回ご提示いただきたい。 濁水処理施設の水質は、あくまで現場で処理をした水の水質の管理のことであって、それに対して下流河川は河川の水質に関する議論なので、きちんと書き分けておく必要がある。また、濁度が環境基準を超えるのは、大雨が降った時には常に起こる。一般の人に誤解がないように説明をする必要がある。	工事に伴い発生する排水を処理し、濁水処理施設から放流される水質の評価基準（SS:25mg/L以下）と、下流河川における濁度の評価基準（濁度10度以上の日数）を区別します。また、出水時には濁度10度以上となる日が多いことを説明します。[資料-4]
5	希少猛禽類は3科8種が確認されており、現地調査がマニュアルに沿って適正になされた結果として、この地域の鳥の実態が正確に把握されている。これだけの種類がここに生息しているということは、自然環境の豊かさの指標となっている。今回の結果を見る限りでは、工事の影響は今のところはほとんどないであろうと評価できる。	今後も引き続き希少猛禽類に対する工事影響を確認するため、モニタリングを継続します。 [資料-4]

第3回委員会における委員指摘事項とその対応2

整理番号	指摘事項	対応
6	希少猛禽類の営巣地は毎年同じところではないため、モニタリングをしながら繁殖指標行動をしっかりと把握し、何かあった場合には専門家の意見を聞いて順応的に対応をしていく必要がある。	工事中も引き続き希少猛禽類調査を実施し、順応的に対応していきます。[資料-4]
7	ノスリについては、愛媛県内で繁殖が確認されており、本調査地においても将来繁殖するようになる可能性が考えられるため、気を付ける必要がある。	ノスリ等その他の猛禽類の繁殖可能性にも留意し希少猛禽類調査を行っています。[資料-4]
8	ユキモチソウ、シランについては生残率が高く、保全措置が非常にうまくいっている。シランはすでにたくさんあるが、ユキモチソウに関しては周辺で増えてくる可能性があるため、それもモニタリングをお願いしたい。	ユキモチソウは種子から再生産される可能性もあるため、増殖個体についても調査を行いました。[別紙-4]
9	特定外来植物は、今後、土砂を盛り上げている谷に入ってくる可能性があるため、注意しておくこと。	建設発生土受入れ地の盛土付近についても、特定外来生物の侵入に注意します。[別紙-5]
10	保全措置がうまくいかなかったゴショイチゴについては、周辺でも減少傾向にある。谷を埋め立てた跡地に植えて、保全を地域の人たちが担ってくれるようなシステムができると良い。なお、ゴショイチゴは発芽特性等がわかっておらず、挿し木も難しいため、栽培が難しいという課題がある。	周辺で減少傾向にありましたが、事業用地内（建設発生土受入れ地）で多数の個体を確認しました。新規確認した個体は移植を行い、事業終了後を見据え、適切に管理していきます。[別紙-6、7]
11	早明浦ダムの周りは本当に環境が良いため、皆さんに親しんでいただいて、利用していただけたらいいと思う。イベントだけではなくて、遊歩道を整備して、春夏秋冬、いつ行っても楽しい、一年中楽しめるような環境ができるといい。	早明浦ダム再生事業後も、早明浦ダムの環境を生かした利用についても検討を進めていきたいと思っています。
12	インフラツーリズムは、早明浦ダム単独でやっても仕方がない。モンベル等の複数のアクターがこの地域で環境に親しむ活動を連携して取り組んでいただくのがいいと思う。そもそも早明浦ダムというのが日本の資産なので、工事中だけでなく、再生事業が終わった後も含め、国土交通省とも連携して早明浦ダムを売り出していた方がいいと思う。	香川県や観光協議会等と連携し、ダム見学会の継続的な実施や、インフラツーリズム進めており、引き続きいろいろな関係者との連携も取り組んでいきたいと思っています。[資料-4]
13	よく環境巡視をして、報告もされていると思う。このような指摘事項と対応の記録はできれば公表できるようなかたちにしてほしい。	環境巡視の指摘と対応については、公表する場合を想定し、履歴として記録に残すように致します。[資料-4]
14	PFAS（ペルフルオロアルキル化合物及びポリフルオロアルキル化合物）について、厚生労働省が2020年に暫定基準値（50ng/L以下）を公表しており、早明浦ダムでも一度調べていただければと思う。	環境省の公共用水域調査において、PFOS及びPFOAの測定が行われており、高知県では吉野川の調査地点「本山沈下橋」を含み、全ての地点で基準値を下回っています。[別紙-8]

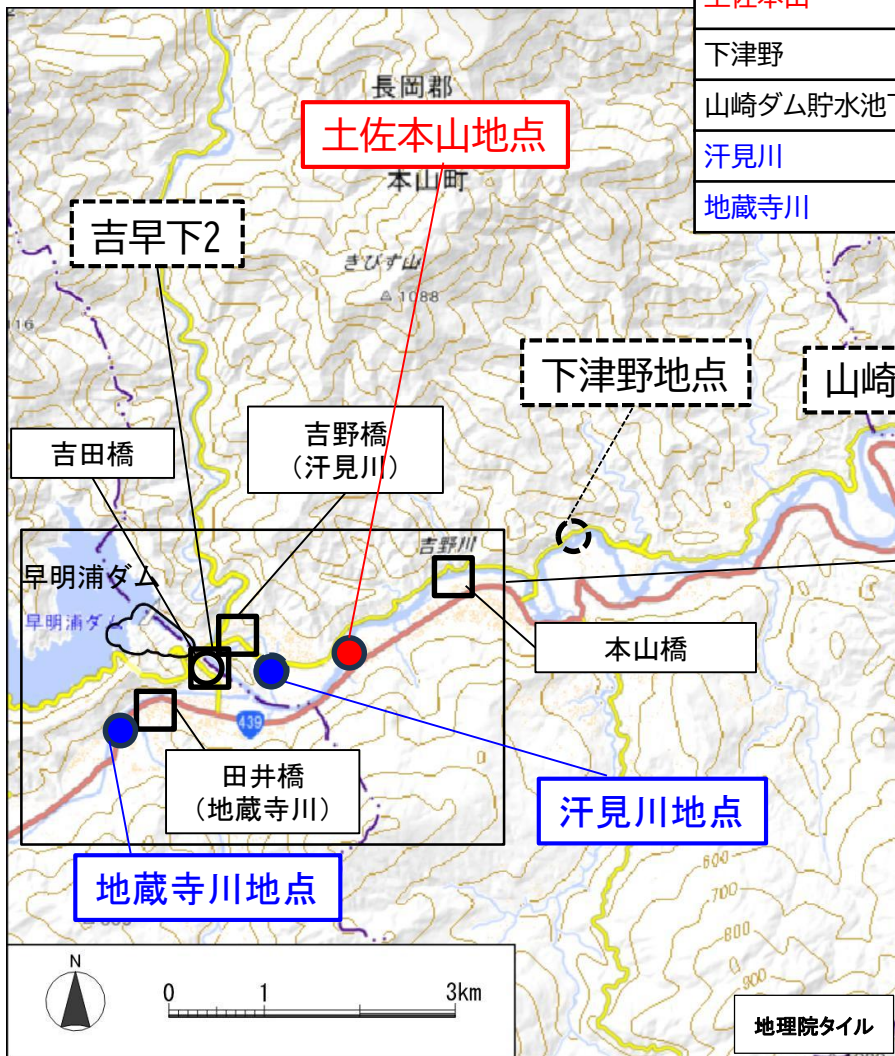
[別紙-1]吉野川環境調査地点における調査の実施 (案)

- 国土交通省が実施している吉野川環境調査について、水資源機構で必要に応じて、再生事業による環境への影響を把握するために必要な調査を実施する。
- 工事の実施による環境影響予測の結果、下流河川では地蔵寺川、汗見川等の流入河川の合流後には影響が小さいことが予測されているため、吉野川本川における調査地点は「土佐本山」までとする。
- 調査時期及び調査方法は、これまでの調査内容を踏襲する。

調査項目	底生動物調査	魚類調査	付着藻類調査
調査地点	3 地点（p4参照）： - 吉野川本川, 1 地点（土佐本山） - 比較対象地点, 2 地点（支川・汗見川、地蔵寺川）		
調査時期	年 2 回 - 夏季：7月中下旬頃（梅雨明け後の水位が安定した時期） - 秋季：10月中旬頃（出水後の水位が安定した時期及びアユ産卵期）		
調査方法 ※「河川砂防技術基準 調査編(H26.4版)第11章」を参考に実施。	- 各調査地点において、河川流心の左岸（又は右岸）に、コドラート（50×50cm）を沈めて、その面積内の石礫をサデ網に採取し、石礫の表面に確認できる肉眼的生物をピンセットで採取する。 - これらの石礫を容器内で洗い、この水をサラシ布で濾過して布上に付着した生物を採取し、中性ホルマリン（5%濃度）で固定する。 - 室内分析により生物種の同定及び個体数を計測する。	- 捕獲調査及び潜水観察を実施する。 - 各調査地点において「刺網」により魚類を捕獲する。 - 水中メガネとシュノーケルを用いて潜水し、移動しながら一定幅内（1～1.5m）に分布する魚類の個体数を種別（目視により種を同定）に計数、記録する。計数値は、観察面積（移動距離×観察幅）で除すことにより、10㎡当たりの魚種別生息密度を算出する。	- 石礫を4個取り、表面5×5cmの区割を定め、一定面積内の付着物をすべてブラシで剥離させ試料とする（計100cm²分）。 - 試料の半分（50cm²分）は中性ホルマリン（5%濃度）で固定する。 - 残りの試料（50cm²分）は、強熱減量測定用試料としてクーラーボックスで氷冷して分析室に持ち帰る。 - 試料は室内分析する（強熱減量、細胞数、生物種の同定）。

[別紙-1] 環境調査地点(案)

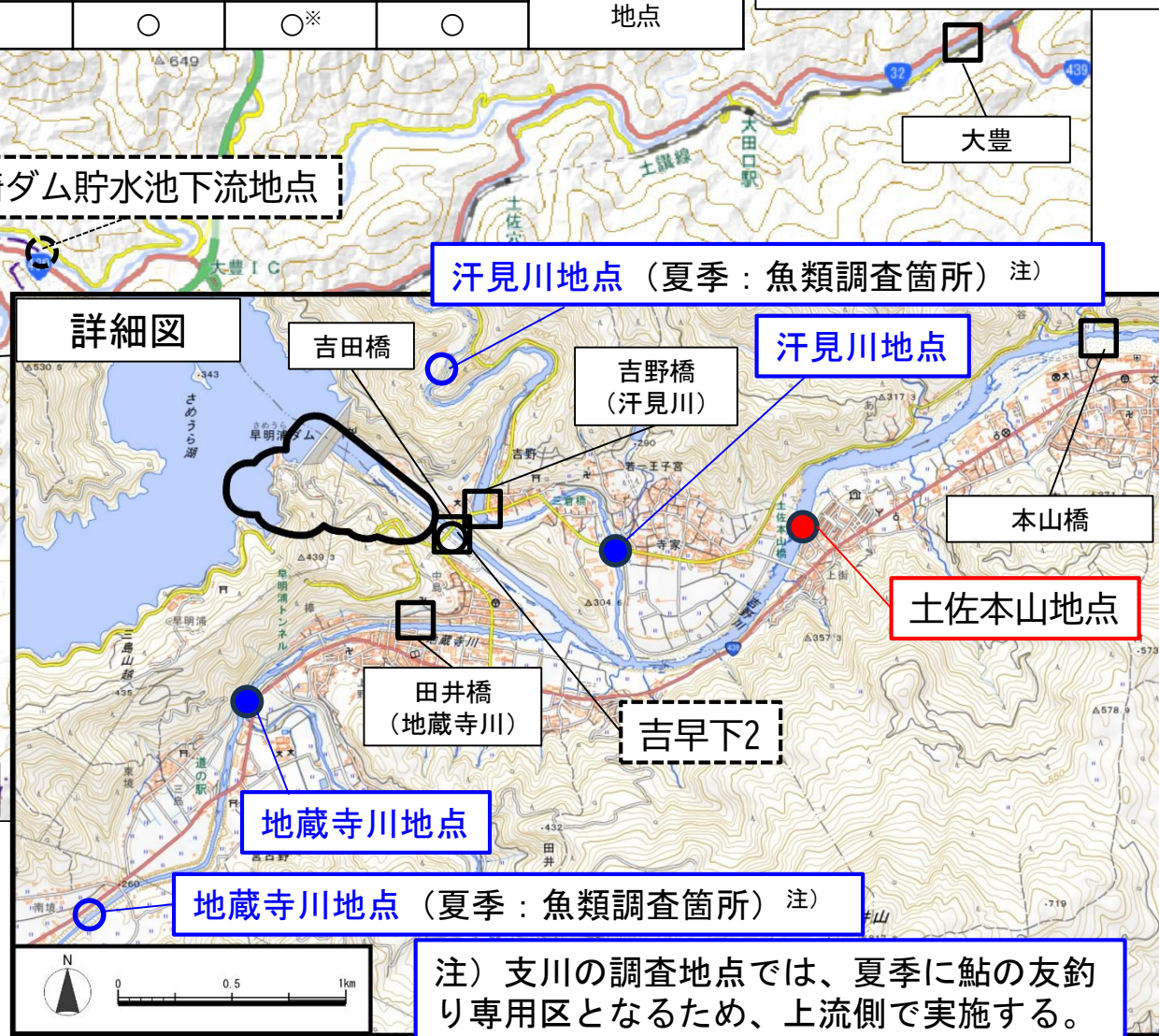
■水質調査地点



- :調査地点(吉野川本川)
- :調査地点(支川)
- :自動観測(水温・濁度)
- :吉野川環境調査地点(調査終了)

地点名 赤:吉野川本川 青:支川	底生動物	魚類	付着藻類	備考
吉早下2	- 水国で5年 に1回実施	- 水国で5年 に1回実施	-	-
土佐本山	○	○	○	吉野川環境調査 地点※
下津野	-	-	-	
山崎ダム貯水池下流	-	-	-	
汗見川	○	○※	○	吉野川環境調査 地点
地蔵寺川	○	○※	○	

※工事の実施による環境影響予測の結果、下流河川では地藏寺川、汗見川等の流入河川の合流後には影響が小さいことが予測されているため、吉野川本川における調査地点は「土佐本山」までとする。



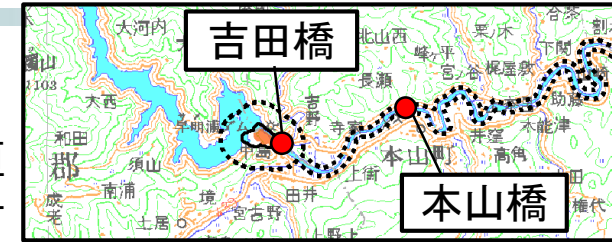
注) 支川の調査地点では、夏季に鮎の友釣り専用区となるため、上流側で実施する。

- 臨時調査計画
- 工事範囲からの濁水流出等による特異な状況が発生した場合には、河川環境への影響を把握するため、臨時調査を実施する。
 - 濁水の発生による調査実施の目安は、以下のとおりとした。
- 濁度：吉田橋において、再生事業が要因と考えられる日平均濁度10以上が1週間継続

- 【濁水発生時】
- 濁りに対して影響が想定される付着藻類の生育状態とそれを主な餌とするアユの成育状態(肥満度の低下、濁水ストレスによる冷水病の発症等)を調査対象とし、水質(濁水)→藻類→アユの関連性を捉えることが可能な内容とする。

臨時調査計画			
調査項目		調査地点	備考
水質調査	5項目(水温・pH・DO・濁度・SS)	3地点(p4参照)： ・吉野川本川, 1地点(土佐本山) ・比較対象地点, 2地点(支川・汗見川、地蔵寺川)	・多項目水質モニターによる測定(水温、pH、DO、濁度)。 ・採水(SS)。
生物調査	底生動物		※1 濁りが底生動物の現存量に影響を及ぼす可能性があるものの、種の同定は時間を要するため不適
	付着藻類		・付着藻類はアユの主餌料であり、濁りによって生育不良となる可能性が高い。 ・強熱残留物量は、河床付着物中の濁質の堆積量を把握。 ・クロロフィルa量は藻類現存量を高感度に捉えることが可能(付着藻類の回復状況を把握)。 ・種の同定は時間を要するため不適。 ・安全確保のため、調査可能な放流条件の時のみ実施。
	魚類		・アユは水産上重要種であり、環境指標性が高い。 ※2 胃内容物分析(強熱残留物量)により、餌に含まれる濁質分を把握。 ・濁水発生時の潜水観察は視界不良のため不可。

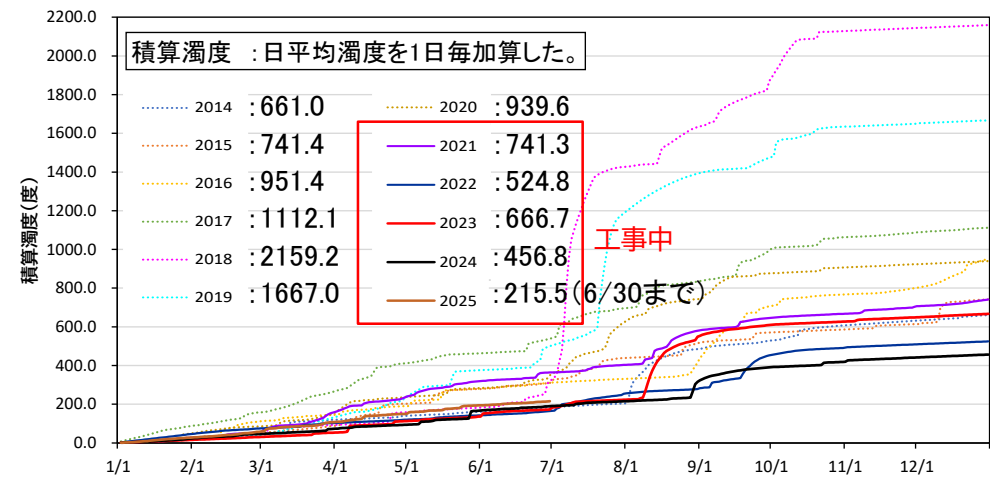
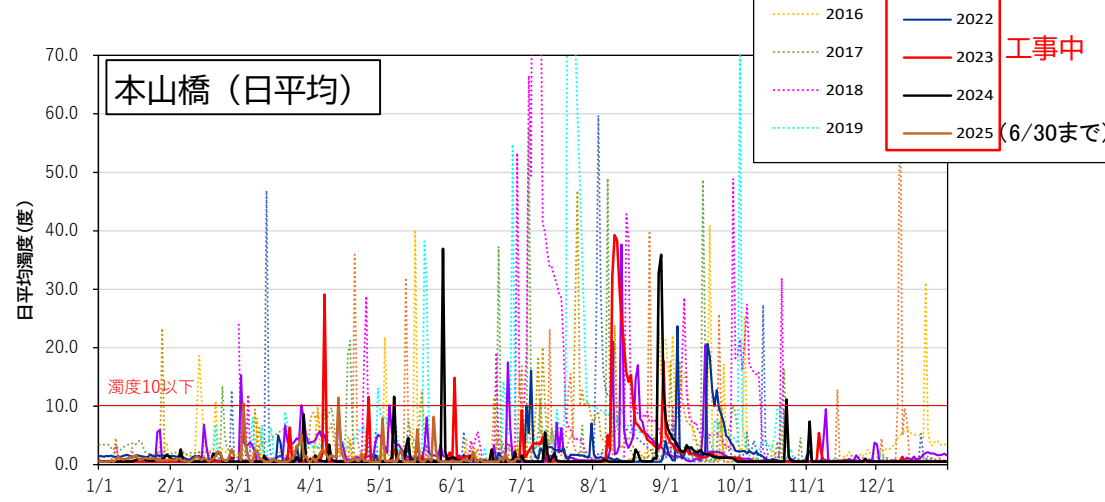
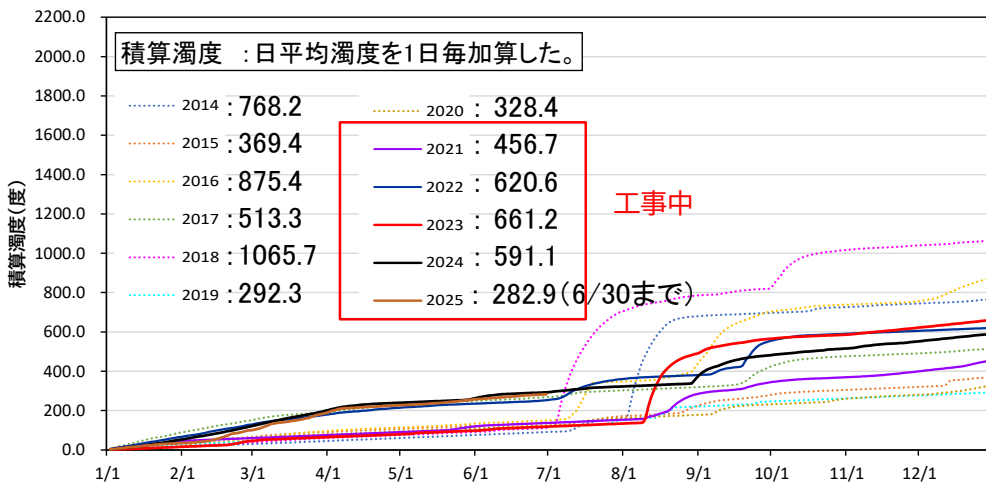
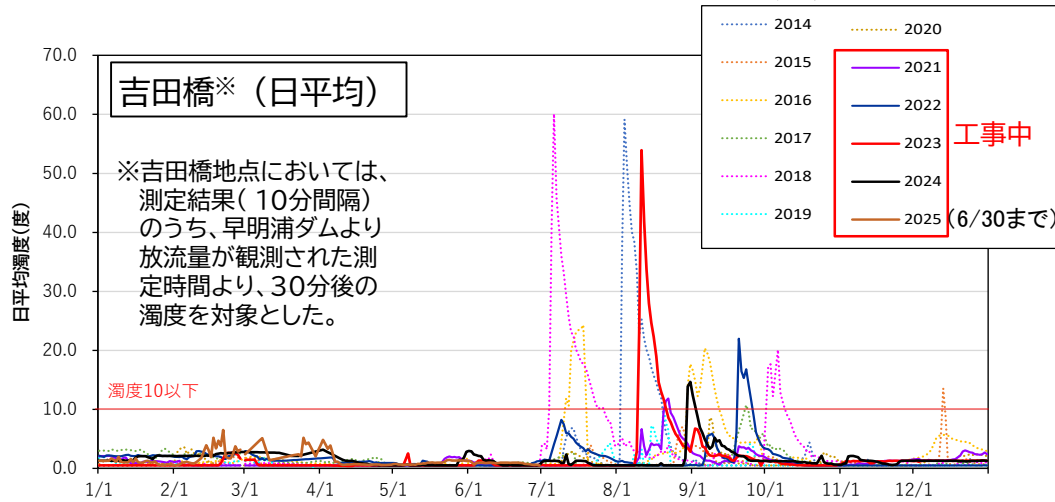
[別紙-3] 工事前及び工事開始後の濁水の測定結果1



■下流河川における濁度測定結果

- 2021年より工事用道路工事、2023年より下流部工事等が開始された。
- 吉田橋の2021～2024年の積算濁度は、工事前の期間（2014～2020年）でみられた値の範囲内であった。2023年8月に高い濁度がみられる期間があったものの、台風6号（8/7～8/10）及び台風7号（8/14～8/15）接近に伴う降水の影響と考えられる。

■吉田橋、本山橋の濁度(日平均)及び積算濁度



注) 積算濁度は、日平均濁度を1日毎に加算した。積算濁度の計算のため、日平均値で欠測となる日は、前後の値から補間した。

注) 測定結果(10分間隔)から、日平均濁度を集計した。その際、濁度が20以上で、時間当たりの降水量が0mmかつ連続して観測されていない場合は、異常値として集計対象外とした。

吉野川上流総合管理所

下流河川における濁度測定結果

- 吉田橋地点では、工事前の期間（2014～2020年）においても、降水等による濁度の上昇が起こり、濁度10以上の日数が多い年もあった。
- 吉田橋地点における工事期間中（2021年以降）の積算濁度は、工事前の期間（2014～2020年）でみられた値の範囲内である。
- 2023年の濁度10以上の日数は、工事中のその他の年と比較するとやや多いが、濁度10以上が継続した8/10～8/21は、台風接近（台風6号、台風7号）に伴う降水の影響と考えられる。

吉田橋、本山橋の積算濁度及び濁度（日平均）10以上の日数

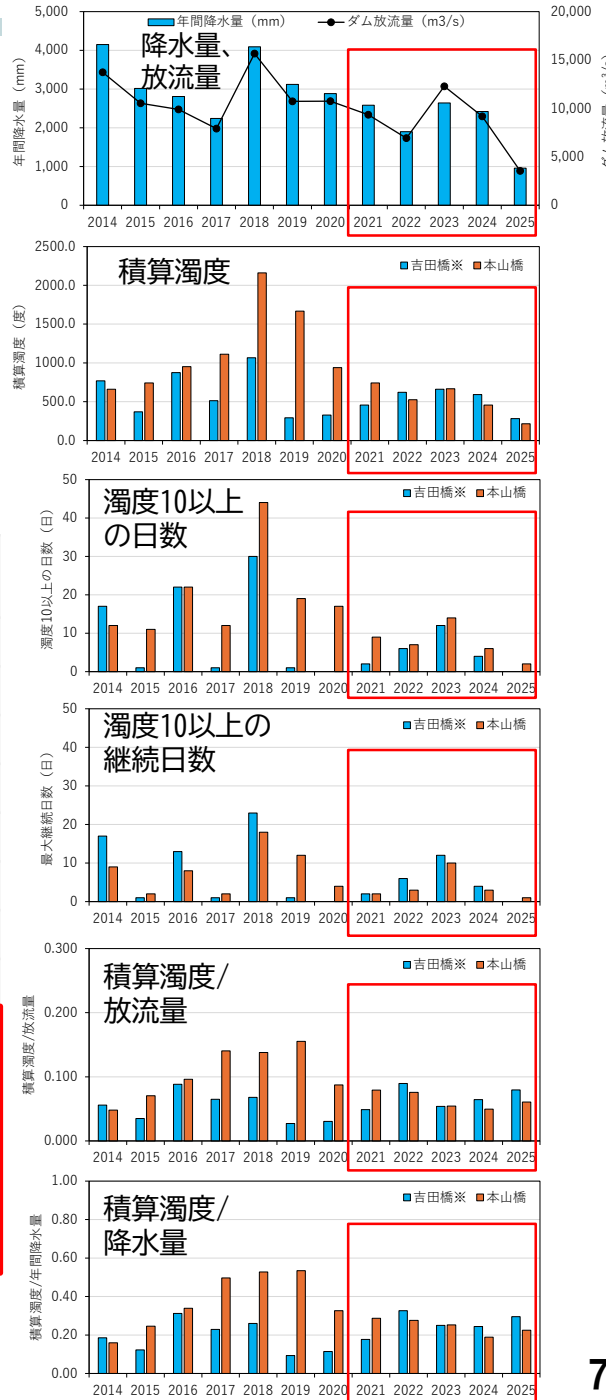
年	年間降水量 (mm)	ダム放流量 (m ³ /s)	積算濁度 (度)		濁度10以上の 日数(日)		濁度10以上の最大継続日数(日)		積算濁度/ 放流量 ^注		積算濁度/ 年間降水量	
	気象庁本山	早明浦ダム	吉田橋※	本山橋	吉田橋※	本山橋	吉田橋※	本山橋	吉田橋※	本山橋	吉田橋※	本山橋
2014	4148.0	13736.6	768.2	661.0	17	12	17	9	0.056	0.048	0.19	0.16
2015	3016.0	10534.0	369.4	741.4	1	11	1	2	0.035	0.070	0.12	0.25
2016	2808.0	9900.5	875.4	951.4	22	22	13	8	0.088	0.096	0.31	0.34
2017	2241.0	7915.6	513.3	1112.1	1	12	1	2	0.065	0.140	0.23	0.50
2018	4093.5	15667.3	1065.7	2159.2	30	44	23	18	0.068	0.138	0.26	0.53
2019	3121.0	10738.3	292.3	1667.0	1	19	1	12	0.027	0.155	0.09	0.53
2020	2882.0	10753.5	328.4	939.6	0	17	0	4	0.031	0.087	0.11	0.33
2021	2584.0	9355.6	456.7	741.3	2	9	2	2	0.049	0.079	0.18	0.29
2022	1902.0	6933.4	620.6	524.8	6	7	6	3	0.090	0.076	0.33	0.28
2023	2641.0	12286.6	661.2	666.7	12	14	12	10	0.054	0.054	0.25	0.25
2024	2422.5	9190.5	591.1	456.8	4	6	4	3	0.064	0.050	0.24	0.19
2025 (6月まで)	959.0	3557.6	282.9	215.5	0	2	0	1	0.080	0.061	0.30	0.22

2021年より工事用道路工事、2023年より下流部工事等開始

注)積算濁度は、日平均濁度を1日に毎加算した。積算濁度の計算のため、日平均値で欠測となる日は、前後の値から補間した。

ダム放流量は日平均放流量の合計とした。

※吉田橋地点においては、測定結果(10分間隔)のうち、早明浦ダムより放流量が観測された測定時間より、30分後の濁度を対象とした。

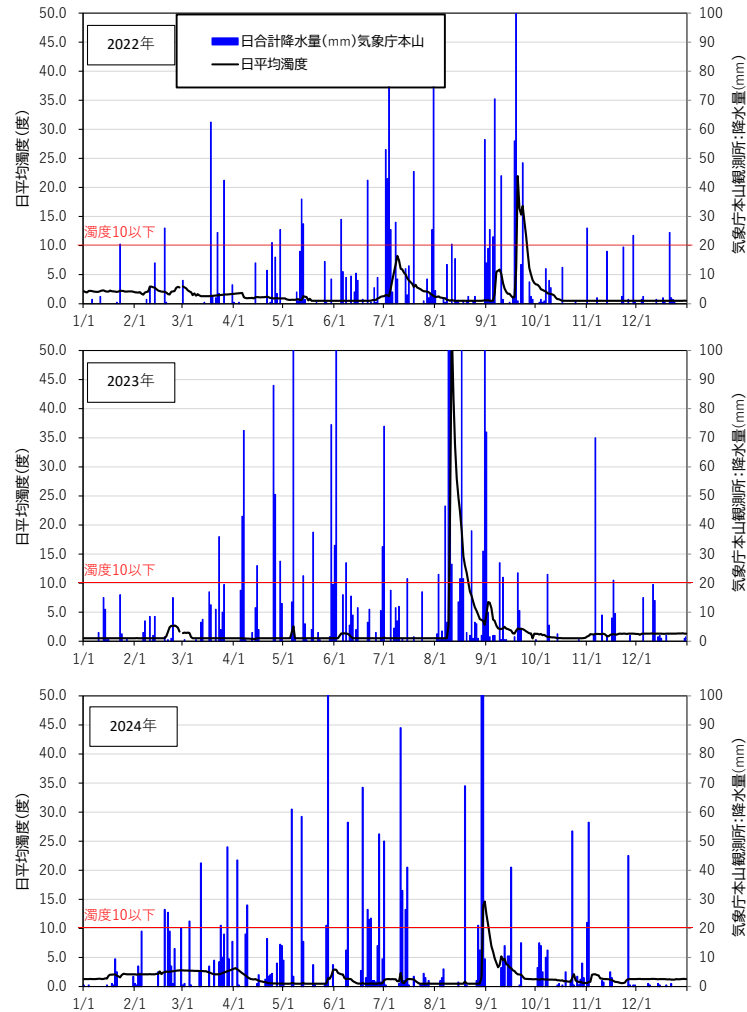


[別紙-3] 工事前及び工事開始後の濁水の測定結果3

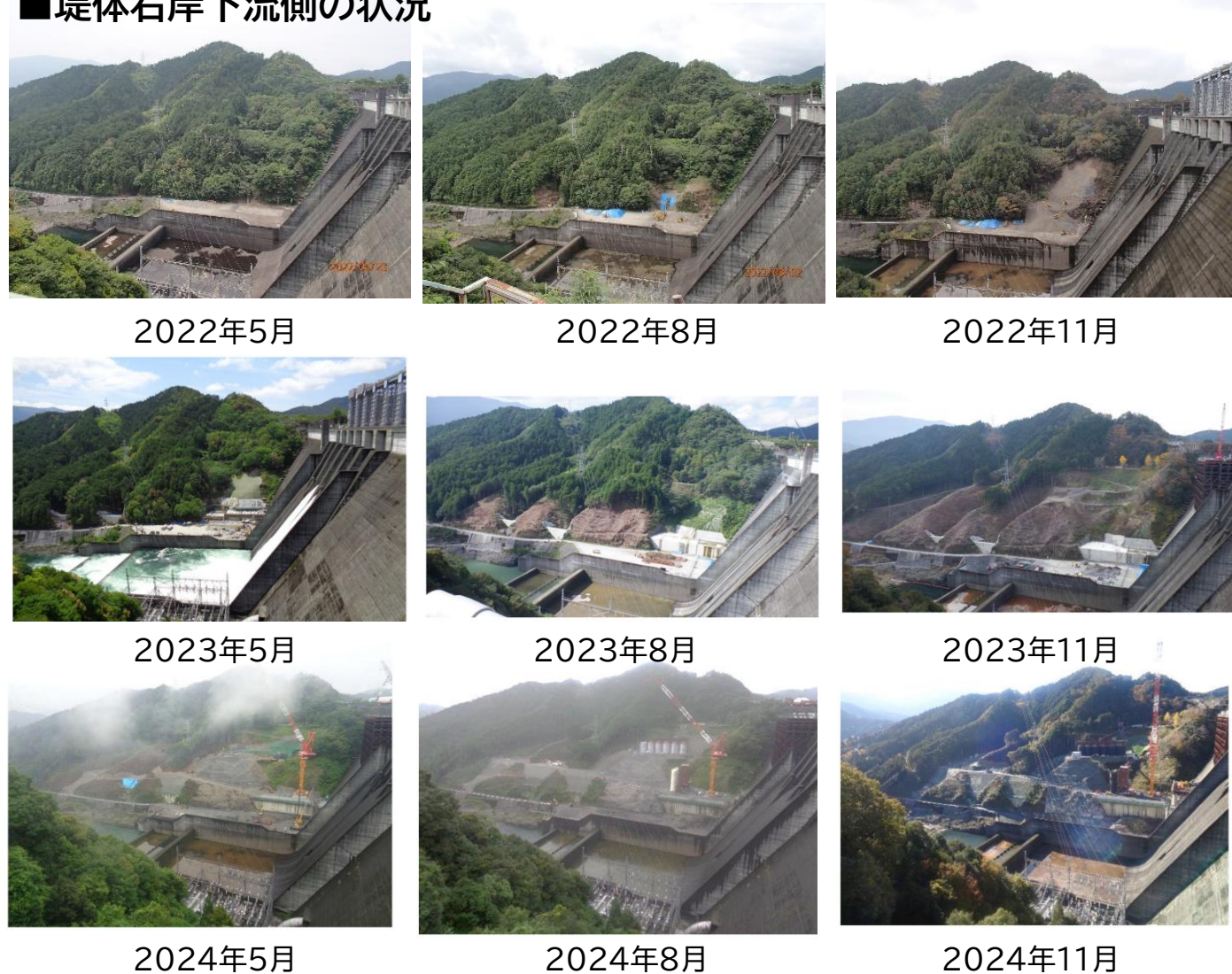
■工事進捗と吉田橋の濁度

- 右岸側の工事箇所において、2022年11月より裸地が目立ち始め、2023年8月以降裸地の範囲は拡大した。
- 2022年以降の濁度10以上の日数は、2022年は6日、2023年は12日、2024年は4日であり、明確な工事の影響は確認できない。
- 今後も濁水の監視を継続し、特異な状況が発生した場合には、臨時調査を行う体制とする。[別紙-2]

■吉田橋の日平均濁度及び降水量



■堤体右岸下流側の状況



※吉田橋地点においては、測定結果(10分間隔)のうち、早明浦ダムより放流量が観測された測定時間より、30分後の濁度を対象とした。

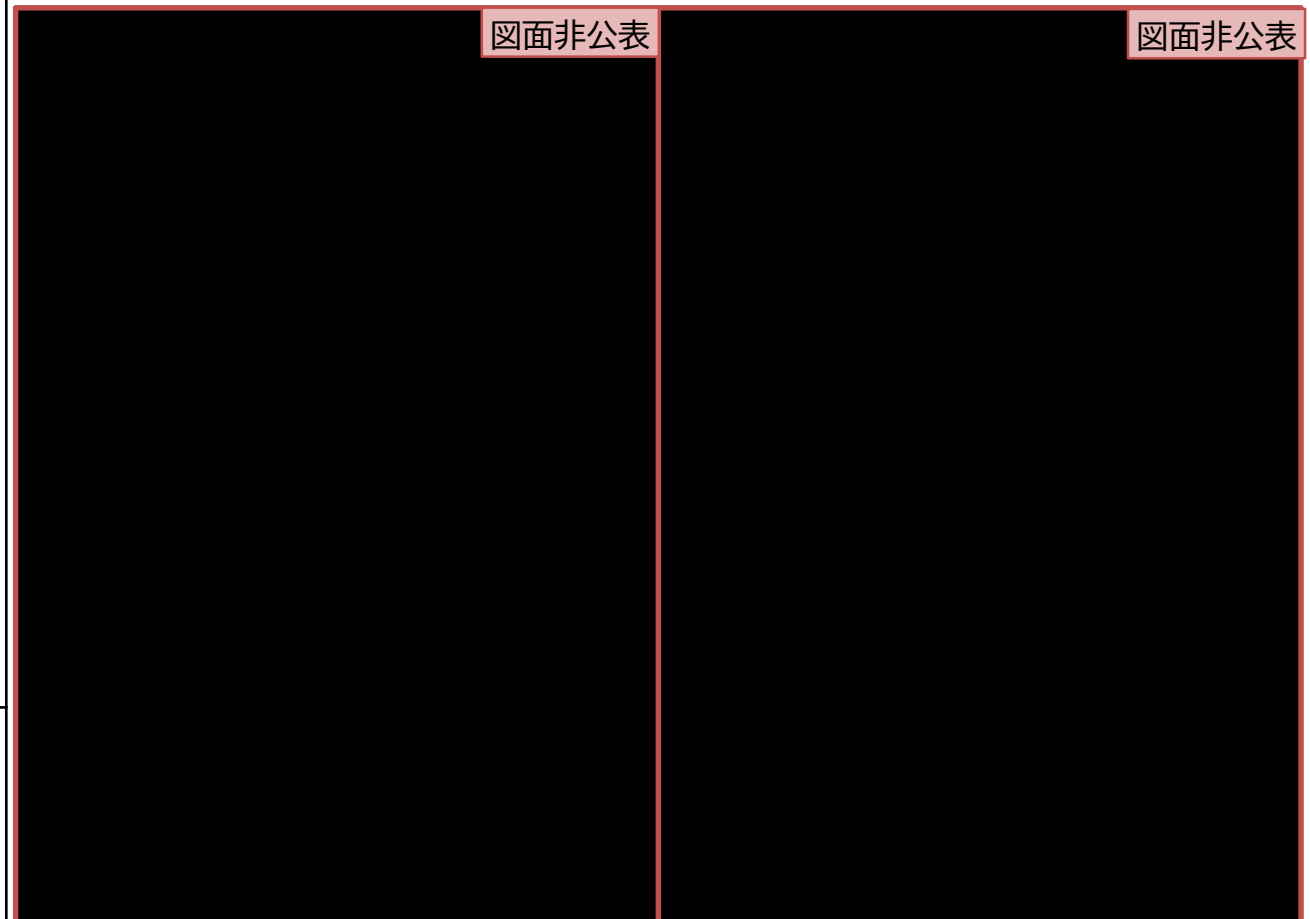
[別紙-4]ユキモチソウ（増殖個体）のモニタリング

■ユキモチソウ（増殖個体）のモニタリングについて

- ・移植したユキモチソウについて、移植個体の種子から再生産される可能性があるため、移植個体の周囲の増殖個体についても調査した。

■調査内容

調査範囲	ユキモチソウと同属で、類似した赤色の液果を形成するカントウマムシグサは、ヒヨドリとシロハラが種子散布者であり、その散布距離は数十メートルの範囲内と考えられている（大石ほか，2020）。また、西日本で秋から冬に果実が熟すテンナンショウ属7種においても、ヒヨドリとシロハラが果実を持ち去っていることが知られている（小林ほか，2017）。そのため、ユキモチソウも同様に、ヒヨドリとシロハラが主要な種子散布者として寄与している可能性が考えられる。以上のことから、 <u>種子が散布されると考えられる数十メートルのうち、移植地と類似する環境（明るい林縁部・緩やかな傾斜）や植生（落葉広葉樹林下など）を踏査により確認し、調査範囲を設定した。</u> （右図参照）
調査方法	任意踏査による確認を基本とし、調査範囲内を歩きながら、調査員による目視観察（必要に応じて双眼鏡を使う）を行う。ユキモチソウを確認した場合は、確認位置と個体数を記録し、写真撮影する。
調査時期	ユキモチソウの開花期にあたる4-5月に1回



増殖個体の調査範囲

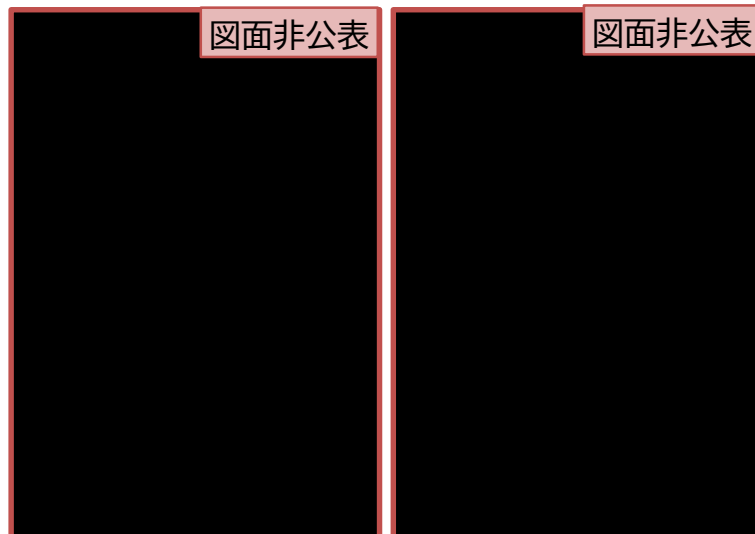
■ユキモチソウ（増殖個体）のモニタリング結果

- ・ 移植先①の周辺では、ユキモチソウの増殖株を合計12個体が確認した。このうち6個体が雄花で、1個体が雌花であった。
- ・ 移植先②の周辺では、増殖株を1個体（雄花）確認した。
- ・ 移植先③の周辺では、増殖株を6個体確認した。このうち2個体が雄花であった。

ユキモチソウ(増殖個体)のモニタリング結果

種名	地点	2025. 4. 30-5. 1			
		♀	♂	無性	計
ユキモチソウ	移植先①周辺	1	6	5	12
	移植先②周辺	0	1	0	1
	移植先③周辺	0	2	4	6
合計		1	9	9	19

注)移植株を除いた、ユキモチソウ(増殖個体)のみの株数を示す。



増殖個体の調査範囲

移植先周辺の生育状況（2025. 4. 30～5. 1）



増殖個体の生育状況

[別紙-5] 特定外来生物（植物）の侵入対策

■特定外来生物（植物）の把握

- ・ 特定外来生物（植物）は、今後、建設発生土受入れ地の土砂を盛り上げている谷に侵入してくる可能性があるが、現時点では盛土が継続的に行われており、植物が継続して生育できる環境ではない。そのため、建設発生土受入れ地における特定外来生物（植物）の確認は、盛土形成が概成した後に実施予定である。
- ・ 一方で、工事車両の通行範囲周辺においても特定外来生物（植物）が侵入・繁茂する可能性もあるため、引き続き工事箇所周辺における特定外来生物（植物）の侵入状況の確認は実施していく。

■調査内容

調査地点	・ 踏査ルート上で目視で確認できる範囲 ・ 建設発生土受入れ地（盛土形成が概成した後に実施）
調査方法	・ 調査地点内を踏査し、特定外来生物の生育の有無を確認する。特定外来生物が確認できた場合は確認位置と個体数を記録し、写真を撮影する。
調査時期	・ 侵入する可能性の高い種の確認適期を含む2回/年 ・ シランのモニタリング時（5-6月；オオキンケイギク、オオカワヂシャ等の確認適期） ・ 8-9月（オオハンゴンソウ、アレチウリ等の確認適期） ※ ツルヒヨドリは目立たない小さく白い花をつける。11～12月が花期であるが、それ以前でも葉により容易に確認可能である。

図面非公表

特定外来生物(植物)の
把握のための調査地点

■工事範囲への侵入時に対策が必要となる 特定外来生物及び確認適期

科	特定外来生物	確認適期※1
ヒユ科	ナガエツルノゲイトウ	4～10月（花期）
セリ科	ブラジルチドメグサ	4～6月（花期）
サトイモ科	ボタンウキクサ	5～10月（花期）
アカウキクサ科	アゾルラ・クリスタタ	秋季（紅葉する）
キク科	オオキンケイギク	5～7月（花期）
	ミズヒマワリ	8～10月（花期）
	ツルヒヨドリ	11～12月（花期）
	オオハンゴンソウ	7～10月（花期）
	ナルトサワギク	年中（花期）
ウリ科	アレチウリ	8～10月（花期）
モウセンゴケ科	ナガエモウセンゴケ	不明
アリノトウグサ科	オオフサモ	5～7月（花期）
タヌキモ科	エフクレタヌキモ	春季と秋季（花期）
アカバナ科	オオバナミズキンバイ等	不明
イネ科	ビーチグラス	不明
イネ科	スパルティナ属全種	7～9月（花期）
ゴマノハグサ科	オオカワヂシャ	4～9月（花期）

※1 侵入生物データベース(国立環境研究所)、ツルヒヨドリ防除計画(沖縄県, 2020)参照。

※2 網掛け(■)は、高知県で注意すべき外来種リスト(高知県, 2019)に記載されており、特定外来生物の中でも特に侵入する可能性の高い種を示す。

■残存個体の確認

- ・ 前回委員会までの調査で把握している、対象事業実施区域内におけるゴシヨイチゴの残存個体2株の内、1株は消失しており、もう1株は幼株を確認した。

■新規個体の確認(対象事業実施区域外)

- ・ 事業実施区域外において、新規に2地点（A、B）で生育を確認した。
- ・ 地点Aは3株の生育を、地点Bは約10株の生育を確認した。



ゴシヨイチゴ（残置個体①）の遠景
（令和7年4月30日撮影）



ゴシヨイチゴ（残置個体①）の近景（個体ナシ）
（令和7年4月30日撮影）



ゴシヨイチゴ（残置個体②）の遠景
（令和7年4月30日撮影）



ゴシヨイチゴ（残置個体②）の近景（幼株有）
（令和7年4月30日撮影）



ゴシヨイチゴ（地点A）の遠景
（令和7年5月21日撮影）



ゴシヨイチゴ（地点A）の近景（3株）
（令和7年5月21日撮影）



ゴシヨイチゴ（地点B）の遠景
（令和7年4月30日撮影）



ゴシヨイチゴ（地点B）の近景（約10株）
（令和7年4月30日撮影）

[別紙-7]ゴシヨイチゴの移植①

■新規個体の確認(対象事業実施区域内)

- 対象事業実施区域内の伐採跡地において、ゴシヨイチゴを多数確認した。令和7年6月11日に調査を実施したところ、伐採跡地の斜面上において、4集団113株のゴシヨイチゴを確認した。高さ約0.2～2.0mの株で構成されていた。
- ゴシヨイチゴの属する日本のキイチゴ属の多くの種は、初年茎(1年枝)は地表から長く直立か斜上するシュートが伸長し、葉を付け、栄養生長のみをする(鳴橋・久米, 2019)。今回確認した株は開花がみられず、その多くが長く直立するシュートを伸長していた。そのため、自生地のすべての株は今年、発芽・伸長したことが推測された。

図面非公表

写真非公表

自生地①(GI①)

自生地②(GI②)

57株

32株

自生地③(GI③)

自生地④(GI④)

12株

12株



対象事業実施区域内
のゴシヨイチゴの生育状況 **13**

自生地(対象事業実施区域内)の状況

[別紙-7]ゴシヨイチゴの移植②

図面非公表

■対象事業実施区域内で確認された新規個体の移植

- ゴシヨイチゴの確認範囲の一部（GI①の一部）では、令和7年7月より盛土を行う計画となっていることから、盛土で消失する範囲の移植を検討し、令和7年7月7日～9日に移植を行った。

移植方法及び移植個体数

移植プラン	移植方法	移植個体数
①	株移植：特定の個体を対象に移植を実施する方法。	25個体を移植地に、32個体をプランターに移植した。
②	クローン移植：栄養繁殖可能な植物の個体の一部を採取し、移植する方法。	144本と66本の挿し穂を作成し、それぞれ別の場所に設置した。

移植作業の実施状況

図面非公表

移植先準備

移植作業

移植元の掘り取り

移植作業後(25個体)



プランター移植



プランター移植後(32個体)



挿し穂作り



挿し穂移植後(144本)



挿し穂の移植



挿し穂移植後(66本)

PFASについて

- ・2020年に厚生労働省がPFOS及びPFOAについて暫定基準値（50ng/L以下）を公表している。
- ・環境省の公共用水域調査において、PFOS及びPFOAの測定が行われており、高知県ではほとんどの地点で1.0ng/Lを下回る値であり、基準値を超過する地点はなかった。
- ・早明浦ダム下流の吉野川の調査地点「本山沈下橋」では、令和4年度は0.4ng/L、令和5年度は0.3ng/L未満であった。

高知県内の河川における調査結果（令和4年度）

地点名	河川名	PFOS+PFOA (ng/L)
中仁淀沈下橋	仁淀川	<0.3
国岡橋	日下川	0.7
日の出橋	物部川上流	<0.3
大正流量観測所	四万十川	<0.3
根々崎橋	仁井田川	0.6
高保木堰	新莊川	1.2
竜串橋	三崎川	<0.3
奈半利堰	奈半利川	<0.3
焼山橋	安田川	<0.3
栃の木橋	安芸川	<0.3
河戸堰	松田川	<0.3
赤岡橋	香宗川	7.9
和田川橋	久礼川	0.3
藤縄橋	伊与木川	0.5
押野橋	野根川	<0.3
本山沈下橋	吉野川	0.4

高知県内の河川における調査結果（令和5年度）

地点名	河川名	PFOS+PFOA (ng/L)
藤縄橋（黒潮町）	伊与木川	<0.3
赤岡橋（香南市）	香宗川	3.3
大正流量観測所（四万十町）	四万十川	<0.3
根々崎橋（四万十町）	仁井田川	0.6
高保木堰（須崎市）	新莊川	0.7
国岡橋（日高村）	日下川	0.7
本山沈下橋（本山町）	吉野川	<0.3

【参考】

PFOS・PFOAの性状・用途

科学的にきわめて安定性が高く、難分解性のため長期的に環境に残留すると考えられている。PFOSは泡消火剤・半導体等製品に、PFOAは泡消火剤、繊維等製品に使われてきたため、それらを所有・製造する施設が排出源となりうる。

PFOS・PFOAの国内外の動向

国内において環境省及び自治体の各種調査で検出が確認されている。飲料水においては、現時点で世界的に基準値相当の値は設定されていないが、各国・各機関において目標値の設定等に関する動きがあり、それらを踏まえ国内の水道水及び水環境に係る目標値等が設定された。

出典：「PFOS及びPFOAに関する対応の手引き」（環境省水・大気環境局環境管理課環境汚染対策室）